

# 「A. Pope のテムズ川観」

石川 郁 二

## 目 次

1. 序
2. ポープについて
3. テムズ川の詩句
4. テムズ川と世界平和
5. 結語

## 1. 序

英国において「川」ということになれば、England 南西部の Cotswold Hills の南東に端を発し、ロンドンから北海へ注ぐ the Thames であろう。全長 209 マイル<sup>1)</sup> におよぶ英国最長の川は、英国人にとって誇るべき川であり、「父なるテムズ」である。この論文は Pope の前期作品に表われたテムズ川を中心に、その当時の内外情勢も考慮し、Pope のテムズ川観を調べたものである。

「父なるテムズ」と言われているように、テムズ川は Pope の作品以外にも大いなる憧れ、時には崇拜の念で、他の偉大な詩人達の作品に登場する。16世紀の Edmund Spenser の *Prothalamion* にテムズ川に関する有名な詩句がある。

Sweete Themmes runne softly, till I end my Song.<sup>2)</sup>

19世紀後半から20世紀の詩人 T. S. Eliot も Spenser のこの箇所を土台にして *The Waste Land* の III “The Fire Sermon” でテムズ川に呼び掛けている<sup>3)</sup>。

この Sweet Thames, Father Thames を Pope はどのように見ているのであろうか。

## 2. ポープについて

Alexander Pope は1688年5月21日に London で生まれ、1744年5月30日に死去するまで3

回引っ越しをしている。最初は1700年 London より Binfield, in Windsor Forest へ、2回目は1716年 Binfield より Chiswich へ、最後は1718年 Chiswich より死去するまで住んだ Twickenham へである。London はテムズ川の河口にある。そして Binfield, Chiswich, Twickenham の3つもテムズ川沿いにあり、上流から Binfield, Twickenham, Chiswich という順になっている。つまり Pope は London から3つの中では最も上流の Binfield に移り、次に London 寄りの Chiswich に引っ越し、最後は Binfield と Chiswich の間にある Twickenham に移り住んでおり、誕生から死に至るまでテムズ川と共に生きていたことになる。

Pope の作家としての活動は大きく3つに分けることが出来る。*Pastorals*, *Windsor-Forest*, *The Rape of the Lock* などの作品を書いた29歳までの前期、30歳代のほぼ10年間に出した古典作品の翻訳及び編纂の中期、そしてその後の *The Dunciad* を中心とする satirist としての後期である。

Pope の作品の中で最もよくテムズ川が描かれ、かつ作品構成の1つともなっているのは Binfield, in Windsor Forest で書かれた *Windsor-Forest* においてである。*Windsor-Forest* と *Pastorals* を中心に「テムズ川観」を調べていきたい。

### 3. テムズ川の詩句

*Windsor-Forest* や他の作品でテムズ川はほとんど美しく描かれている。「ほとんど」というのは、後期の作品である *The Dunciad* の中ではテムズ川の名前が出てきても単にそれだけで、「美しい」ということに関する形容がないということであり、テムズ川を悪く、「醜」として描いている箇所があるという訳ではない。テムズ川はいつも “Father Thames” “the silver Thames” であり “fair Thames” である。

テムズ川に関する描写は大きく2つに分けることが出来る。

- (1) テムズ川自体について書かれた描写
- (2) 周囲の美しさからテムズ川を間接的に表現している描写

この2つは明確に分ける事が困難な箇所もあるが、一応理解しやすいように分けて調べてみたい。

(1)のテムズ川自体について描写された詩句はあまり数が多くない。形容としてはさきほど出した “Father Thames,” “the silver Thames” そして “fair Thames” がよく見かけられるが、それ以外にも “gentle Thames” “Unbounded Thames” “my Thames” がある。いずれも悪い形容ではなく、どちらかというと好ましい形容が付いている。“the swans of Thames” “sweet bird of Thames” という表現でテムズ川が使われている所もある。

Grotto のあった Twickenham で書かれた “Verses on a Grotto by the River Thames at Twickenham”<sup>4)</sup> にテムズ川の波の描写が見える。その波は「陰をなしている洞穴を通り、幅広い鏡を照らす」ほど清らかで輝いており、透き通っていることが分る。

この水清きテムズ川の生まれに言及している箇所が *Pastorals* の “Spring” にある。

Fair *Thames* flow gently from thy sacred Spring,  
 While on thy Banks *Sicilian* Muses sing ;  
 Let Vernal Airs thro’ trembling Osiers play,  
 And *Albion’s* Cliffs resound the Rural Lay. (“Spring” 3-6)

この泉は聖なるものであり、そこから流れ出るテムズ川の水に向かい、*Pastorals* をアルピオンの絶壁に鳴り響かせよと歌っている。実際のテムズ川もやはり田園地帯である Thames Head の泉に源を発している。そして細い流れが次第に大きくなり、田園地帯から都市部に流れ、北海へと流れ出すのだ。

次に(2)の周囲の美しさから間接的にテムズ川を表現している描写に移りたい。この “the visionary Scene” は田園地帯の方が多い。

A Shepherd’s Boy (he seeks no better Name)  
 Let forth his Flocks along the silver *Thame*,  
 Where dancing Sun-beams on the Waters play’d,  
 And verdant Alders form’d a quiv’ring Shade. (“Summer” 1-4)

*Pastorals* の “Summer” にある詩句だ。太陽の光が川面を照らし、緑のはんの木が木陰を作り川面に揺れている。羊飼いの若者が羊の群をテムズ川の岸に連れて行くという描写で、いかにもどかで清々しい情景である。この牧歌的雰囲気は “Spring” にも出ている。

Blest *Thames’s* Shores the brightest Beauties yield,  
 Feed here my Lambs, I’ll seek no distant Field. (“Spring” 63-4)

聖なるテムズ川の岸はどこよりも良い羊の餌の牧草を育てている。テムズ川の回りには丘や草地があり、それが川面に映し出されているのである。

テムズの川辺に吹く風に言及している箇所が *Windsor-Forest* (l. 263) に出ている。木陰が多く、草原があり、そこを流れるテムズの川辺には芳香に満ちた微風が吹いている。美しい自然と

羊の群，平和なテムズ川の流れが想像出来よう。

テムズ川沿いの建物はどうであろうか。*Windsor-Forest* にウィンザー城の描写がある。天空に向って聳えたっている塔のある城は緑の丘の中に建っている。自然と溶け合って一体となり，側にはテムズ川が流れている。*The Rape of the Lock* には Hampton Court が出てくる。堂々とした威風のある宮殿であり，英国の政治家達やアン女王が会議をしたり雑談をかわしたりする所である。Belinda はテムズ川を船でやって来る。つまりテムズ川が横を流れているのだ。そしてこの大きな建物は花が咲き乱れる牧草地に接している。London の西南にある Hampton Court でも自然の広がりには接しているということは素晴らしい。

テムズ川沿いには城，宮殿という厳めしい建物だけではなく，低い家並の普通の家も見られる。そしてその家々の間に細い小道がいたる所で見受けられる。これは *Imitations of English Poets* として書かれた中の “Spenser: The Alley” に出てくる。テムズ川が流れるあらゆる町に小道があり，町を大きく蛇行しながら流れているテムズ川に，多くのボートが軽やかに遊んでいる。田園地帯でもなく，厳めしい宮殿の描写とも違う，暖かい雰囲気を感じられる箇所である。

Pope の作品におけるテムズ川はごみごみした所を流れることなく，いつも景観を保っている。そして田園地帯と都市部が明確に分かれてはいない。テムズ川の流れが都市部に近付き急に宮殿が現われたとしても，そこには森林や牧草地がともなって描かれ，“the Silver Thames” がその風景を映しながら流れている。

この時代の London に関する記述が歴史書にあるので引用したい。

この世紀の末に50万の住民を算えたロンドンだけが，都市という描写にふさわしい唯一の場所であった。しかしそこにおいてすら人は，都市の交通路のなかでもっともすばらしいものであるテムズ川で楽しむことができたし，またボートがいやなら，半時間ほど歩きさえすれば，騒がしいチープサイドから，うぐいすが出没する丘のすぐ下で狩りを楽しむ人たちがしぎややまうずらにわなをしかけている牧草地に行くことができた。ロンドンっ子でさえ，機械的な輸送手段の助けをかりなくても，自然を見出し，自然に言い寄ることができたのである<sup>5)</sup>。

17世紀の London について書かれた箇所である。これを読むと Pope の詩に描かれている建物と自然の関係が，単に文学作品という fiction の中でのことだけではなく，当時の英国としては当然の事だったに違いない。

さて，テムズ川を紅の大海と比べている箇所がある。

Not with more Glories, in th' Etherial Plain,  
The Sun first rises o'er the purpled Main,  
Than issuing forth, the Rival of his Beams

Lanch'd on the Bosom of the Silver Thames. (*The Rape of the Lock* II.1-4)

ここは Belinda が昇り始める太陽よりも美しいと、Belinda の美を強調している詩句である。「紅の大海に昇る太陽」と「銀に栄えるテムズ川に乗り出すベリンダ」との比較である。“Sun”と“Rival of his Beams” (Belinda) の比較で、Belinda はその太陽にも負けてはいないと書かれている。“rises”と“Lanch'd”, “purpled”と“Silver”という対照から考えて、テムズ川を大海に見立てているとしても問題はないであろう。「紅の大海」の美は「銀に栄えるテムズ川」の美と比べられているのだ。

冬のテムズ川はどうか。*Pastorals* の“Winter”にその描写がある。“Winter”は Daphne の死を嘆いて歌っている詩である。樹木に葉はなく、緑の草地は衰えて夏の爽やかさはないが、木立は銀の霜で輝き、川辺には柳がある。そして冬のテムズ川は Daphne の死に涙で溢れるように思われるのだ。冬のテムズ川には冬としての美がある。

*Windsor-Forest* にはテムズの子孫といわれる田園のニンフ Lodona が出てくる。この描写には Lodona の魅力と共にテムズ川を取り巻く自然が歌われている。Lodona は腰に革帯をまき、髪を細長いリボンでしばっている。肩には矢筒を、そして投げやりを持っている乙女である。ある時、獣を夢中で追っていて、知らぬうちに森の境界を越えてしまう。その時、パンの神が彼女を見付けて欲望に燃え、彼女を追い掛ける。パンの神の荒くなった呼吸が逃げる彼女の髪の毛にかかり、今にも捕えられそうになった時、彼女は涙に伏し、溶け、静かな銀の流れになってしまう。乙女の清純さを保つこの流れに女神は水浴をする。Lodona の流れは森林の緑に染まり、木々や空、飛ぶ鳥の群を川面に映し出しながらゆっくりと蛇行し、テムズ川へと流れ込む。

Lodona の純潔、処女の冷たさを保つ流れがテムズ川に流れ込むのだから、テムズ川にもその純潔さがあり、パンの神を魅了するほどの Lodona の美しさもテムズ川にはあると語っているようである。パンの神に屈せず、俗人的なものに落ちないという点、それと共に神を出し、テムズ川を神聖なものへと引き上げようとする所も感じられるのではないだろうか。

#### 4. テムズ川と世界平和

このように美しく、神聖なテムズ川に Pope は何を見ているのであろうか。表面的描写から考えるならば、英国の川の代表であるテムズ川を誉め称え、美しく描き上げているだけのようである。しかし、もう一步進んで考えていくと、テムズ川の静かな流れに平和を見、平和を期待しているようである。

17世紀から18世紀にかけての英国は1つの大きな曲り角にきていた。王党派と議会派の対立、

宗教上の争い、イングランドとスコットランドの対立から統合、現在の英国の下地がこの時代にあった。又、国外においてもアメリカの植民地問題、スペインやフランスとの関係、東インド会社など、揺れ動く国際情勢の中を英国は有利な立場になりつつあった。

当時の庶民の生活を見るにあたって、女泥棒の一生を描いた小説である Daniel Defoe の *Moll Flanders*<sup>6)</sup> が参考になる。上流階級と下層市民の貧富の差は大きかったようだ。一般庶民は貴族のような派手な生活をするわけではなく、生活を切り詰めて貯蓄をしている。庶民同士の人情はまだ残っており、お互いに助け合っている。刑罰は厳しく、盗みをしただけで縛り首になる者がいた。追剥、火事場泥棒の記述も見える。主人公の *Moll Flanders* は最後アメリカで成功し、今までの生活を悔い改め、幸せな余生を送るのだが、アメリカに渡るのに嵐や海賊の危険が待ち受けていると心配している所があり、アメリカに渡るのに42日かかっている。アメリカに渡っても生活はとても大変である。

このような当時の英国を考えるに Pope は英国が強くなり、世界のリーダーシップを取ることが大切だと考えていたようだ。

Let *Volga's* Banks with Iron Squadrons shine,  
 And Groves of Lances glitter on the *Rhine*,  
 Let barb'rous *Ganges* arm a servile Train ;  
 Be mine the Blessings of a peaceful Reign. (Windsor-Forest 363-6)

ここで平和な統治を望んでいる Pope はさらに言葉を続けて、ウィンザーの森では狩以外に血を流すことなく、武器は鳥や獣のみに使用し、戦争には使わないことを望んでいる。

ステュアート朝最後の君主であるアン女王は英国を今のスコットランドとの合体による *Great Britain* 王国にした。それまで若者達は戦い、神聖な館が火事で燃え、内乱が続発した。

She saw her Sons with purple Deaths expire,  
 Her sacred Domes involv'd in rolling Fire,  
 A dreadful Series of Intestine Wars,  
 Inglorious Triumphs, and dishonest Scars.  
 At length great ANNA said—Let Discord cease !  
 She said, the World obey'd, and all was Peace !  
 In that blest Moment, from his Oozy Bed  
 Old Father *Thames* advanc'd his rev'rend Head. (Windsor-Forest 323-30)

“Let Discord cease!” “all was Peace!” とアン女王が言う声に呼応するかのように、テムズ川の描写がこの詩句の後に続き、テムズ川の偉大さが歌われ、テムズ川が平和の担い手のように賛美されている。そしてテムズ川の名譽を星へと引き上げるように望んでいる。

テムズ川の名譽を星にしようという描写は、*The Rape of the Lock* において、切られた Belinda の髪の毛が星になり、物語の争いが終るといふのによく似ている。永遠に輝く星になることが *The Rape of the Lock* を終らせ、平和をもたらしている。*Windsor-Forest* ではテムズ川は星になってはいないが、その期待が込められている。

ここに出ている平和といふのはどういう平和を意味しているのであろうか。当時としては当然かもしれないが、Pope の意味する平和とはあくまでも英国が中心になり、力で他を押え、その安定の上に立つ平和である。王達が英国の女王の前に屈んで懇願する平和であり、ウインザーの森の樹木から作られた艦隊をテムズ川に浮かばせ、世界を安定させる平和である。

Thou too, great Father of the *British* Floods!  
 With joyful Pride survey'st our lofty Woods,  
 Where tow'ring Oaks their growing Honours rear,  
 And future Navies on thy Shores appear. (*Windsor-Forest* 219-22)

インドに「聖ジョージ十字章」を掲げることを望んでいる Pope は、荒れ狂う氷の海も英国の船が行くと、明るい炎が光を放ち静まり反り、南の空の下ではさんごは赤く、ルビーは光を増すと歌っている。

しかし、だからといって専政を敷いてその上に英国が君臨することを望んでいるわけではない。英国が力を持ち平和になった時、各国はそれぞれ自由を得、国民は平和に生活出来るようになると Pope は言っているのだ。そして恐怖、心配、野望がなくなり、武器は錆付いたままになって、緑の森と花の咲き乱れた平原でミューズの神が平和を謳歌するやうにと、*Windsor-Forest* の中で歌っている。

## 5. 結 語

テムズ川沿いに住居した Pope は「テムズ川の流れ」を「英国の流れ」と考えていたようである。Pope のテムズ川はあくまでも美しい。田園地帯、都市部と流れるテムズ川は汚れることなくいつも緑を伴ない滔々と流れて行く。海へ出たテムズ川は全世界に英国の力を運び伝える。Pope にとってテムズ川は英国内を流れる一河川としての美しい川以上のものがあつたようだ。

英国が戦いや外国との競争で不利になると、テムズ川の波が荒くなる。平和な時のテムズ川は静かに流れている。流れているのはテムズ川であり、英国を中心にした世界である。テムズ川に艦隊を浮かべ、世界に乗り出し、まず英国の力で戦いを鎮め、その上に君臨することなく、各国の国民が平和な生活を送れるようになることが大切なのである。しかし、中心にあるのは英国である。その為にはテムズ川は美しくあらねばならないのだろう。

世界の平和をテムズ川の流れに見出した Pope は逆説的にテムズ川に平穏を望んでいるのである。テムズ川が静かに流れることが英国にとって、世界にとって、平和の印なのである。

「Pope のテムズ川」は広く、河口から7つの海につながる世界全体をテムズ川の中に見、テムズ川が世界の縮図になっているのである。

#### 註

- 1) *The Random House Dictionary*
- 2) Edmund Spenser, *Prothalamion* in *Spenser's Poetical Works*, ed J. C. Smith and E. De Selincourt (London: Oxford University Press, 1969), p. 601.
- 3) Sweet Thames, run softly till I end my song,  
Sweet Thames, run softly, for I speak not loud or long.
- 4) Alexander Pope, *The Poems of Alexander Pope*, ed. John Butt (London: Methuen & Co. Ltd., 1968); この論文で引用する Pope の作品は総てこの版による。
- 5) G. M. トレヴェリアン, 『イギリス史2』, 大野真弓監訳 (みすず書房, 1981年), p. 162.
- 6) Daniel Defoe, *Moll Flanders* (New York: The New English Library Limited, 1964).